

博士學位論文内容の要旨

学位申請者氏名	大西 祥恵
論文題目	モダニズムの胃袋 Virginia Woolf と 同時代の小説における食の表象
論文審査担当者	主 査 武田 美保子
	審査委員 中村 紘一
	審査委員 佐伯 恵子

Virginia Woolf は、人間の内面よりも外的な事実に重きを置くエドワード朝の作家たち、Arnold Bennett や H. G. Wells などの従来の手法を批判し、よりリアルな人物描写をめざして人間の内的心理を描こうと試みた。その技法として「意識の流れ」を用いるなど、人間の内的な心理を描こうとした 20 世紀初期の英国モダニズム作家たちは、一般的には人間の内面を重視し身体性を軽視していたと考えられている。しかし「心と体や脳は融合して」おり、別々に仕切り分けることはできないと考えていたウルフは、人間の内的心理に光を当てると同時に、外的な要因の内面への影響についても関心を抱いていたように見える。こうした精神的なものとの物質的なものとの調和を描くことは、E. M. Forster の *Howards End* に代表されるように、ウルフと同時代の 20 世紀英国モダニズム小説に共通するテーマである。これまで食の描写はその物質性ゆえに、モダニズム小説を論じる際に軽視される傾向にあった。しかしながら、モダニズム小説の中で、こうした食の描写は、従来の小説のように外的事実を表すだけでなく、内的な心理とも密接に関わるものとして機能している。それゆえ本論文は、ヴァージニア・ウルフの小説を中心に、モダニズム小説において、食が精神と身体の両方の状態を伝えるためにいかに重要な役割を果たしているかを、食の表象を分析することで明らかにしている。

第 1 章「Virginia Woolf の「食べ物に対するコンプレックス」」では、当時精神を病んでいたウルフが治療のために受けていた「安静療法(rest cure)」と彼女の「食べ物に対するコンプレックス」との関わりに注目する。『ダロウェイ夫人』の中で Septimus Warren Smith が強いられる「安静療法」は、安静と食事の強要により体重を増やすことで、心身の健康を取り戻すための治療であり、当時の優生学的な思想が反映されている。第 1 節「*Mrs Dalloway* における食事療法 Virginia Woolf と摂食障害」では、『ダロウェイ夫人』のテクストを通して、「安静療法」とウルフの摂食障害との関わりを論じている。

第 2 章「Virginia Woolf における食の政治学」は、フェミニストとして知られるウルフの、食を通して示されるジェンダー・ポリティクスについて論じている。第 1 節「*To the Lighthouse* 中の「食べられる女たち」」では、『灯台へ』中の食の表象を分析することで、子供の精神的な成長と食との関わりや、男性と女性にとっての食の持つ意味の相違などを明らかにする。第 2 節「*Orlando* と *A Room of One's Own* にみる「教養に裏付けられた食い意地」」では、ウルフの

小説やエッセイの中で書くことと食べることが結びつけられていること、またそこでの「食べる女性」の描写が、ヴィクトリア朝的な家庭内天使像からの解放と精神的自立を果たす女性の表象となっていることを論証している。

第3章以降は、モダニズム小説全般における食の表象について検証している。人間の外見を示す外的描写が、内的なものと切り離せない理由の一つとして、それがその時代精神と強く結びついていることが挙げられる。例えば小説の中の食事の描写から、読者は、当時の人々の生活様式、その時代の流行や社会の変化などを見て取ることが出来る。第3章「モダニズムの食卓」では、モダニズム小説を通して、20世紀イギリスの台所事情と当時の階級制度や男女の性役割の変化を読み解いていく。

第1節「モダニズムの「料理男子」」では、現代日本の「料理男子」現象に言及しながら、モダニズム小説の中の料理をする男性の表象を分析し、20世紀初めのイギリスの家庭で起きた家事労働をめぐる変化について検証する。家事使用人の数が激減する第一次世界大戦後のイギリスにおいて、経済的余裕のない家庭の女性たちは、家事を自ら果たさなくてはならなくなる。この「使用人問題」の影響のもと、中産階級の家庭で家事をする女性の数が増え始めた時代に書かれたモダニズム小説の中では、女性のために料理をする男性の描写が見られるようになる。具体的には、E. M. フォースターの『ハワーズ・エンド』と D. H. Lawrence の *Lady Chatterley's Lover*、James Joyce の *Ulysses* を挙げる。さらにこうした男性像は、ヴィクトリア朝的な父権制度や階級制度の揺らぎやジェンダー役割の変化をも反映している。第2節「Virginia Woolf の台所」では、ウルフの二人の料理人とウルフとの関係に注目することで、当時の家庭で深刻になっていた「使用人問題」や彼女の料理人たちがウルフの創作に与えた影響を示す。ウルフは使用人を雇う余裕のある当時の裕福な家庭の女性としては珍しく、実生活の中で自ら料理をした。このウルフの料理への情熱は、彼女の料理人との軋轢から生まれたものである。さらに彼女と料理人との関係は女性の「肖像を描きたい」という彼女の創作意欲を刺激したようで、その結果ウルフは、多くのテクストの中で使用人と女主人との関係を描いている。

さらにこうした食の表象は、モダニズム小説の文体実験とも密接に関わっている。「1910年の12月かその頃に、人間の性質は変わった」というウルフのモダニズム宣言にあるように、モダニズムの作家たちにとって、1910年は画期的な年であった。それは Roger Fry による「後期印象派展」がイギリスで開かれた年であり、その展覧会はウルフをはじめとした当時の作家たちに強い影響をもたらしたのだ。その一つが視覚をはじめとする感覚表現への関心である。フォースターは、ウルフの食事の描写について論じる際に、その感覚表現の巧みさを評価しているが、こうした感覚表現を重視していたのはフォースターも同様であった。さらにこうした感覚表現は、記憶と五感の関わりをその小説の中で提示した Marcel Proust などのフランスの作家たちの影響によるものでもあると思われる。第4章「色と味と匂いのハーモニー モダニズム小説の中の感覚表現」ではモダニズム小説の中の感覚表現の重要性やそれと食の表象との関わりを考察する。

第1節「『ダロウェイ夫人』の色使い」では、ウルフの色彩描写を通して、彼女の視覚表現を分析している。「偉大な作家は偉大な色彩研究家(colourists)である」と述べているように、ウルフは小説の中の色彩表現の重要性について訴えている。ここでは『ダロウェイ夫人』の中の色彩描写を分析することで、そうした色のイメージが、階級や優生学的な当時の医学思想、植民地政策、

個人の尊厳などの問題と密接に関わっていることを明らかにする。さらにウルフの視覚表現と同様に、フォースターやジョイスの用いる聴覚や触覚などの感覚表現についても言及する。それによりモダニズム小説の中でいかに感覚表現が重視されていたのかを検証する。

第2節「味覚の記憶 *Ulysses* の“Calypso”における食べ物の消化と記憶のインターテクスチャリティー」では、ジョイスの『ユリシーズ』第4挿話“Calypso”を通して、記憶と味覚などの感覚との関わりについて述べる。ジョイスは『ユリシーズ』を「人間の身体の叙事詩」と呼び、テキストの各挿話に身体の各器官の役割を与えている。そうした身体性を強調する役割を果たすのが、『ユリシーズ』の小説の中に頻繁に登場する食事の場面や食べ物への言及である。こうした身体による食べ物の消化と排出は、文字の摂取と排出という読書行為や創作行為とも比喩的に重ね合わされている。さらにこのことは、インターテクスチャリティーを重視するモダニズムの実験とも密接に関わっている。

第3節「*Flush* における女性と動物との絆と匂いの美学」では、ウルフの実験的な小説である *Flush* での匂いの描写に注目している。『フラッシュ』は、のちに Robert Browning 夫人となる詩人 Elizabeth Barrett の愛犬コッカー・スパニエルの雄の Flush を主人公にしており、この小説での犬とこの女性を結ぶ深い絆と愛情は、その食欲とも密接に関わっている。そしてこの小説では、飼い主とペットの絆を超えて、社会的な弱者としての女性と動物の類似が示される。さらに『フラッシュ』では、犬の知覚手段となっている匂いを言語化するというウルフの実験が見られ、そうした感覚表現が重要な役割を果たしている。

最後に、結びとしてモダニズム小説において、いかに食の描写が重要なものであるかについてまとめている。厳しい性規範が浸透していた19世紀ヴィクトリア朝には、身体的なものが抑圧され、軽視されていた。その反動として書かれた19世紀末から20世紀初頭の英国小説において、こうした身体的、物質的なものの役割が再び見直される。しかしこうした小説に見られる過剰な「身体性」「物質性」を批判の対象としていたモダニズム小説では、人間の内的な心理を探究する一方で、身体的なものと精神的なものとの調和を重要なテーマとし、両者の相互関係を示すものとして、モダニズム小説の中で、食事の描写が利用されている。さらに感覚表現を重視するモダニズム小説において、視覚や匂い、味覚などの感覚表現と食事の描写は切り離せないものであり、食の表象は、その実験性とも結びついたきわめて重要な役割を担っているといえる。